

“ダンカニズム”に関する一考察

遠藤かおり（東京大学大学院 院生）

【研究の背景と目的】

イサドラ・ダンカン（1877-1927）は、ベルエポックから第一次世界大戦後のヨーロッパを生きた舞踊家である。本人がこの言葉を使用した形跡はないが、その思想は、Duncanisme 或いは Isadorisme と表現され、それによって舞踊家としてはじめて芸術家と認められたと言っても過言ではない。本研究は、20 世紀初頭のモデルニテの雰囲気と当時の芸術家たちの思想を捉えることで、“ダンカニズム”の一端を浮かび上がらせることを試みる。時代との齟齬に、イサドラの舞踊が内包していたイデオロギーだけでなく、舞踊から失われた何かが明らかになるだろう。日本において、イサドラ・ダンカンという一人の女性芸術家は、正当に評価されてこなかった。本研究によって、新しい視点を示すことができれば幸いである。

【方法】

文献及び一次史料の読解を中心とし、実地や視察で得た所感を加える。

【本論】

イサドラは、過剰な筋肉の鍛錬は、心を苦しめるだけだとバレエ教育を否定し、休息や呼吸、歩行といった人間の普遍的な動作とその心理的作用を舞踊に取り入れた。肉体をして“私たちはいかに別様でありうるか”というビジョンを現前させたその踊りは、社会に衝撃を与えた。しかし、その自然な様子を技術のなさとしなした新聞記者が、ある日「ダンカン嬢は踊れるのか」と題した記事を書けると、イサドラはすぐに反論の手紙を送った。すると、その論争に目をつけた別の新聞社から「未来の舞踊」と題した講演を依頼された。彼女はの中で、女性は身体を解き放つことで、新しい知識を得て、未来の可能性を切り拓くことができると語り、「新しい女性像」を提示した。1903 年、この講演が小冊子として出版されると、その名声は不動のものとなったが、彼女の存在は、精神性や知性を男性のみのものとする当時の価値観からすると、あまりにも革新的かつ異端であった。前衛芸術家たちは、イサドラに回答するように自らのマニフェストを発表した。

ヨーロッパにおける前衛精神の主要な推進者の一人である詩人の G・アポリネールは、「ダンスはスポーツである」（1907）と題した記事で、その理由を「規律による服従」に置いた。イタリア未来派の F・マリネッティは、戦争、速度、進歩、機械を愛し、「舞踊は、筋肉の可能性を超え、増殖した身体」の理想を目指さなければならない」と主張した。ドイツ表現主義の画家で“青騎士”

を結成した W・カンディンスキーは、未来の舞踊は、これまで美しいとされてこなかった動きから始まるとした。

一方、「今この瞬間」を自分のためだけに生きると言う詩的な美に賛同し、自身の理論への応用を試みたのはロシアの演劇家 K・スタニスラフスキーがいるが、純粋詩を提唱した詩人 P・ヴァレリーが、身体「生理学的思想」に、自らの造語である Somatisme と名づけ、それを「手段」として複数の作品を残していることは興味深い。ヴァレリーによれば舞踊とは、「変身変容の行為」であった。芸術家たちの思想は、その後、社会体制や教育、文化と密接に結びついていった。

この様な大きな時局の変化にあって、1914 年に勃発した大戦は、皮肉にも女性の社会進出を促し、ある種の自由をもたらした。戦後大都市には、ダンスホールやキャバレー、プロ養成や教師資格の授与を掲げるダンス教室が乱立し、ダンスが大流行した。「大いなるエゴイズム」としての感情表現に価値を置いた M・ウィグマンが、モダンダンスの中心的人物となった。イサドラが望んだ通り、女性たちは自由に表現し輝き出したが、彼女の目には、ただ窮屈な洋服を脱ぎ捨てることを自由と履き違え、無知のまま消費社会に飲み込まれていくように映ったに違いない。1921 年、共産主義を掲げるロシアへ旅立ち、理想の学校の実現に奔走したまま、1927 年、ニースで帰らぬ人となった。

彼女は踊りが形式化されることを避け、動画に記録されることを拒んだ。現在残っている唯一のわずかな映像は、盗撮によるものである。死後、“Isadorables”と名付けられた数人の愛弟子たちによって、その舞踊は静かに継承された。イサドラは自らの教育意義について次のように語っている。「私の学校は新たな芸術を創造するだろうし、あるいは新たな芸術への道を示すであろう、と私は信じている。新世代のみが新世界を表現し得るであろうし、新たな才能や新たな理想を発見し得るであろう。これを教えるなどということは、私には出来ない。あなた方自身で行動すべきである。」その言葉を象徴するように、継承者によるレッスンを受けた M・ベジャール、A・ハルプリンは、舞踊家としての思想形成の根幹にその記憶があることを明言している。彼らの功績を想えば、ダンカニズムは直系の継承者に限ったものではなく、現在に至るまで地下茎となって舞踊界全体を支えていると想像するに難くないだろう。

【考察】

イサドラ・ダンカンは、「モダンダンスの母」と称されてきた。しかし、Modernisme、すなわち「近代的なるもの」に一切加担しなかったことこそ彼女の最大の功績であったのではないか。

（文献リストは発表において提示いたします）